〔書　評〕

石綿敏雄著

『現代言語理論と格』

仁　田　義　雄

1　全体的な印象

評者が違えば，感想や評価は当然異なってくるが，筆者石綿の考え方や立場と基本的な所で近いところがあるからか，評者仁田には，本書『現代言語理論と格』に対して，共感するところが少なくなかった。本書および本書を通して，石綿の研究・記述姿勢に対して，評者の感じた全体的な印象をまずしるしておく。一つは，大事なところや総体をまず概括的・全体的に（したがって見方によれば粗く）捉えることに重点を置き，細かい違いや残された未解決の問題にさほどこだわらない，という姿勢が上げられよう。また，小異を捨て大同につくといった融通性のある姿勢をも感じる。たとえば，より十全な分析・記述を得るために，「現代の先端的な文法理論はもちろんのこと……，伝統的な文法でつかわれてきた見かたもまた，必要かつ適切であるばあいには……適用することは有意義」や「できるだけ広い見地に立ち，自由に適切に，さまざまな手法を活用すべき」(p. 110) と述べるところや，格の定立に対して，先行研究で提案されたさまざまな格を，重ね合わせながら一つの方向性を得るという作業に対して，「ミクロとしてみればたしかに問題は山積しているが，マクロとしてみると全体の大きな傾向が存在することがうかがわれるようにおもわれる。」(p. 124) と捉えるところなどに，石綿のこの姿勢を見て取ることができよう。ただ，この種の姿勢は，「それについても，あまり問題にしないで，」(p. 270) などといったあり方で，各論の細部の問題を積み残すことにもなる。これはなにも，石綿が，枠組みの提示だけで具体的な文法現象の分析・記述を行っていないということを，意味してはいない。統語論と意味論・語彙論とをつなぐ分析・記述を行っている石綿であれば，細かい記述的な作業を多々行っている。石綿のこの種の姿勢を，全体に対する理論的な枠組み提示を最優先させる立場（これを理論的全体俯瞰型と仮称）や，全体への見通しはさておき，限定された局所に対するきめ細かい解明を重視するタイプ（これを細部精密型と仮称）に対して，実務的全体俯瞰（網打ち）型と仮称しておく。文法現象総体に対するきめ細かい一貫した分析・記述を行いうるためには，いずれのタイプをも兼ね備えることが必要である。それにしても，そのようなことは一人の人間のよくなしうることではないだろう。細部への漏れのない細かい記述を重視したり，理論的な潔癖さを求めたりするタイプの人間には，石綿のこの種の姿勢は不満が残るかもしれない。

細部精密型・理論的全体俯瞰型・実務的全体俯瞰型のいずれに傾くかといったことは，良いか悪いかの問題ではなく，最終的には志向性や好みに基因するのであろう。ただ，評者には，日本語研究の世界で実務的全体俯瞰型がもう少し増えてもよいように思われる。また，石綿のこの種の姿勢は，石綿が，自然言語処理という，ある意味では実用的な研究に関わっていた，ということが関係しているのかもしれない。

さらに感じたことの一つとして，本書のような書物は，本誌『国語学』の読者の相当数に対しては，いわゆるバタ臭いものとして映るのではないか，ということである。評者としては，この種の書物が，本誌の読者に対しても，バタ臭くは映らなくなるのも，さほど遠いことではないと期待している（いやもうバタ臭くは映っていないのかもしれない）。

2　本書の内容についての概観

引き続き本書の内容に入る。二つのテーマへの記述が本書の中心部分を成している。一つは現代の文法理論への展望的概観であり，他の一つは日本語用言の格構造の解析である。さらに，これに付編として，補説的にヴォイスやテンス・アスペクトや人称・指示など格構造以外への概観が付け加わっている。

2.1　現代の文法理論への展望的概観

石綿も，文が大きく命題とモダリティ，本書の用語で言えば〈ディクトゥム〉と〈モドゥス〉に分かれる，という立場に立つ。その上で，従来の日本における日本語文法研究の流れについて，石綿は，「日本語の文法研究では，ディクトゥムよりモドゥスのほうがよく研究されている。」(p. 27) と総括する。事実，かつて評者が日本文法学派と仮称したように，70年代あたりまでの日本における文法研究のメインストリートは，いわゆる陳述論と言われる，文成立論を考察対象の中心に据えた流れであった。こういった総括の上に立って，石綿は，命題に対する研究の必要性を指摘する。したがって，現代の文法理論への展望的概観も，命題の分析・記述のありように力点を置いたものになっている。この命題の記述を重視するという姿勢は，文法理論の概観の章に限らず，本書全体を貫いている基調である。事実，石綿は「この本の目標は……ディクトゥム（命題）の解析にある。」(p. 1) と述べている。また，表現形式とそれが担い表す意味とが，どのように有機的に関連づけ分析・記述されるのかが，石綿が，現代の文法理論を展望する時（および用言の格構造に対する自らの分析・記述へ）の一つの観点になっている。言語を運用するということが，表現形式から意味を獲得すること――〈言語理解〉――であり，意味から表現形式を生成すること――〈言語表現〉――であることを考えれば，文法分析・記述は，この両者をふたつながらに充たすことが要請されよう。石綿が，文法理論の展望や用言の格構造への自らの分析・記述に当たって，表現形式と意味との関連づけに留意す

るのは，評者には至極妥当なことであると思われる。

以下，現代の文法理論への石綿の展望的概観を簡単に見ておく。まず，シャルル・バイイのディクトゥムとモドゥスの提唱を取り上げ，生成文法理論の発展史を記述し，ソ連のヴィノグラードフの連語の研究について触れ，「言語学研究会」の連語研究，特に奥田靖雄の「を格の名詞と動詞のくみあわせ」を比較的詳しく紹介している。そして，文の意味論的研究への関係で，アメリカのグルーバ，チェイフ，フィルモアやランゲンドンを取り上げ，フィルモアの展開した格文法については，動詞と名詞の意味的な関係をカテゴリ化することが重要なテーマになるとし，そのタイプ・設定の原則など比較的詳しく紹介している。さらに，フィルモアに先行する理論としてフランスのテニエルを紹介し，日本語文法の観点からもテニエルの理論を評価している。また，言語の意味を捉える，自然言語処理用に設計された理論として，R. シャンクの概念依存文法を紹介している。さらに，生成意味論に触れ，語彙部門を重視し，文の生成・解析の処理を操作的(機械的) に行うことを目指した語彙機能文法を紹介し，一般化句構造文法 (GPSG) にも触れ，そして，結合価理論を共感を持って紹介・説明している。さらに，南不二男の文の階層構造観を紹介し，橋本進吉の文節とアメリカの IC (直接構成素) 分析の類似などを指摘している。この中では，重点的に紹介・説明されているのは，生成文法理論と結合価理論である。

生成文法理論については，標準理論から GB 理論そしてミニマリスト・プログラムまで，発展史を要領よく紹介している。まず，意味と形式，深層構造と表層構造の関係を中心に，標準理論を紹介し，普遍文法とそれを個別言語に移行するパラメータという考えから構築された GB 理論について紹介している。具体的には，X バー理論，θ 理論，α 移動，統率理論，移動の制限に関する理論である境界理論や同一指示に関する理論である束縛理論，コントローラと PRO の関係を扱うコントロールの理論などに対して，紹介・説明が施されている。

結合価理論については，かなり詳しく紹介・説明が行われている。ドイツの結合価理論，特に，ヘルビヒとシェンケル，エンゲルとシューマッハの辞書を取り上げながら，動詞の結合価の考え方を紹介・説明している。さらに，結合価理論の問題点として，共演成分と状況成分の区別――中心的な共演成分，その回りに存在する周辺的な共演成分，さらにその回りに存在する状況成分の関係――や，結合価の概念の拡張として，動詞以外の品詞への結合価（形容詞・名詞の結合価）の拡張問題，また，統語的結合価と意味的結合価の関係，そして，結合価理論の語彙論の分野への適用などについても触れている。また，結合価理論との関連で佐久間鼎の〈番手〉という考え方や，アメリカの記述言語学者であるホケットの place という考えについても言及している。

石綿は，自らが現代の文法理論を展望的に概観する動機として，各々の学派・流れ間の非交流および他の研究方法への無知に対する危惧を上げている。この種の傾向に対し

て危惧を感じる感覚は，極めて健全であると思われる。ただ，そうは思いながらも，様々な理論の中核を平易な言葉で紹介・説明することは至難の業である。石綿は，日本語を研究対象の核に据えながら，こういった困難な作業を行いうる希有な存在である。ただ，さらなる情報の獲得は，やはりそれぞれの専門の書（ないしは専門の解説書）に就かれたい。

2.2 日本語用言の格構造の記述

本書の中心部中の中心部は，「ディクトゥム（命題）の構造」と題された第2章である。この章は，命題の構造と題されてはいるが，基本は日本語用言の格構造への分析・記述である。石綿は，これを動詞のME構造と名づけ，その分析・記述を行っている。石綿の動詞は，いわゆる動詞だけでなく形容詞や名詞述語を含む。用言のME構造は，M(意味）とE（言語表現）の対応を計り，統語論と意味論をつなごうとするものである。つまり，石綿が提示しているものは，用言の取る名詞の意味格とそこに来る名詞の意味特徴，および表層での表示形式を添えた，用言のシソーラスといったものである。もう少し詳しく言えば，用言をまずその意味によって分類しグループに分け，それぞれの用言に対して，深層格（意味格），名詞の意味特徴，表層での表示形式（格助詞）をしるし，深層格については，たとえば，「回ル［O，(L/Dir)］/回ス［A，O，(Dir)］」のように，随意のものに，「(　)」を付すことを通して，必須と随意の区別を一部行い，さらに，名詞のサンプルおよび例文を付け，必要に応じて注記を付している。

石綿が提出しているものは，上掲の情報付きの用言のレキシコンである。別見出しとして取り出された，同形異義の用言を含み，約760語の用言がレキシコンには含まれている。命題の構造への分析・記述として，このようなレキシコンが提出されていることを，退屈ないしはエレガントでないと感じるか，命題の主要部分の解析・生成には有用であると感じるかは，読者が文法分析・文法記述をどのように捉えるかに，大きく拠っている。文の解析・生成に対する文法記述の実効性が気にかかる評者などには，エレガントでなくとも，この種のレキシコンの存在は必要であると思われる。

まず，用言を動態述語と状態述語に分け，さらに，それぞれに対して意味に基づく分類を施している。石綿の行っている意味分類は，分類語彙表的な，用言が表す概念的な意味の類似性に基づく分類である。用言への意味分類は二桁で行われている。動態述語に関しては，まず，人間の活動・移動・接着・変化・抽象関係の五つに分け，人間の活動に1，移動に2と番号を付し，さらにその中を下位類化している。たとえば，移動を例に取れば，V2.1移動一般「動ク，移ル……」，V2.2方向性を持つ移動「進ム，進メル……」，V2.3出発移動「去ル，逃ゲル……」，V2.4着点移動「着ク，入レル……」，V2.5経路移動「越エル，渡ル……」，V2.6様態移動「歩ク，走ル……」，V2.7方向移動「向ク，ソレル……」，V2.8移動の逆「佇ム，止マル……」のようにである。それぞれ用言

をどの意味類に属させるかは，誰がやっても難しく，意見の一致をみがたい問題であろう。

深層格の定立に関しては，先行研究での提案に考慮しながら，次のような深層格を提案している。下線部がその例の一部である（例文は漢字を増やして記した）。

【動作主】(A)「彼が掃除をはじめた」/【経験者】(E)「彼が体験した話」/【対象】(O)「掃除が始まった」「お湯をわかす」「信頼回復に努める」/【相手】(P-O)「塩をこしょうとまぜる」「水は酸素と水素からなる」「かぼちゃは栄養に富む」/(P-A)「こどもに菓子を与える」/(P-E)「妹と仲がいい」/(Pc)［いっしょの相手］「ジョンはメアリとワシントンに行った」/【引用】(Cit)「彼は彼女に「さようなら」と言った」/【道具・手段】(Instr)「赤鉛筆で書く」「暴力で解決する」/【範囲】(Ra)「日本ではこれは有罪になる」「勝負に負ける」「矢がよろいに当たる」/【原因】(Cause)「風邪で学校を休む」「酒に酔う」「結果に失望する」/【根拠】(Fonda)「この事実から判断した」/【目的】(Purp)「南洋に植物採集に行く」/【材料・原料】(Mat)「コンクリートで家を建てる」/【限度・基準】(Lim)「基準に足りない」「百人でうちきる」/【比較の相手】(Comp)「去年より寒い」/【場所】(Loc)「研究室に助手がいる」「ここに幸あり」/【起点】(S)「駅からタクシーに乗る」「自宅を出る」/【方向】(Dir)「広島へ向けて光を送る」「東に向かう道」/【経過域】(Path)「橋を渡る」「町の中心を通る道」/【着点】(G)「下田に着く」「下田へ着く」「東京まで行く」/【時の起点】(Stim)「七時から営業する」/【時の着点】(Gtim)「三時まで待つ」/【数量】(Q)「三時間待つ」/【場所】(Pl)「新宿駅で人を待つ」/【時】(T)「三時に知らせが入った」/【状態】(St)「そのままの状態でいる」の，24 種が取り出されている。ただ，〈相手〉は，さらに対象に対する相手（P-O）や，動作主に対する相手（P-A）や，経験者に対する相手（P-E）などに下位類化されているので，実際の深層格の数はいま少し多くなる。深層格の定立は，誰がやっても一致をみることの難しい問題である。

また，名詞の意味特徴としては，

［hum］「ひと，男」/［ani］「動物，猫」/［con］「もの，これ，いくつ，機械」/［loc］「ところ，どこ，町」/［abs］「こと，考え，成果」/［act］「こと，行動」/［phe］「こと，地震」/［qua］「多数」/［tim］「とき，いつ，土曜日」

を取り出し，様々な意味特徴の名詞を取りうる場合に対して，［div］というラベルを用意している。

ここで，用言の ME 構造の記述例を一二具体的に紹介しておく。

V 1.5　わかる

M　(E(hum))　O (abs)/CitS

E　(に/が)　が

O：英語，問題，電気のこと

このことから彼が虚偽の報告をしたことがわかる

V1.5　かんがえる

M　A (hum)　O (abs/div)/CitS

E　が　　を/について/と

O: 人口問題，あらゆる可能性，実行計画，あの人のこと

のようなあり方で記述が進む。ちなみに，「V1.5」とは，〈人間の活動〉の中の〈認知・理解・思考・判断など〉に属する動詞である。

3　感想および疑問一二

最後に，疑問に感じたことや感想を一二しるしておく。

用言の意味分類は，意味類の中心に属する典型的な用言については，おおかたの一致をみるにしても，中心から外れ周辺に位置する用言については，誰がやってもどこに属させるかに悩む難しい問題である。異論が出ることも少なくないだろう。この種のことは致し方ないこととして，ここでは一々触れない。ただ，意味の包含関係から来るダブリについて取り上げておく。〈人間の活動〉の中に〈人の物理的行為〉が取り立てられ，〈接着〉の中にも〈人の接着行為〉が立てられている。人の接着行為は，人の物理的行為の一種である。人の物理的行為に属する動詞として，「働ク，食ベル，ナデル，磨ク」などと共に，「覆ウ，サワル」，などが［A (hum)［ガ］，O (con)［ヲ］，I (con)［デ］］という同じ格構造で，人の接着行為にも属させられている。

深層格（意味格）の研究も，また，確定的なことを言うのがかなり難しい状況である。

石綿は，「行ク［人ガ〈動作主〉，場所ニ〈着点〉］」のように，分析・記述できる，単純（単一的）な動きしか含んでいない用言に対して，複雑（複合的）な動きが内在している用言を取り出し，主イベントと副イベントの組み合わせによって，記述することを提唱している。たとえば，「店員が客を夜間出口へ導く」に対して，概略，

導ク　主イベント［人Aガ〈動作主〉，人Bヲ〈対象〉，夜間出口ニ〈着点〉，目的［副イベント］

副イベント［人Bガ〈動作主〉，夜間出口ニ〈着点〉］

のような分析・記述を試みている。この種の試みは，動詞が表している動きの内部構造を明示化する上においても，また深層格の担う意味のあり方の安定化のためにも必要であろうと思われる。ただ，この種の複合解析の可能性は，本書が示唆しているような使役的な働きかけのみならず，さらに広く，「割ル，上ゲル」のような，対象変化他動詞にも適応できると思われる。

深層格に対して意見の一致をみることが困難なことを承知の上で，一点だけ疑念的な感想を記しておく。〈相手〉に関するものである。既に触れたように，相手には，動作主に対する相手・経験者に対する相手・対象に対する相手など複数の下位種が設定されている。また，対象に対する相手にしても，

欠ク［O（ガ），P-O（ヲ）］/欠ケル［O（ガ），P-O（ニ）］/異ナル［O（ガ），P-O（ト）］/似ル［O（ガ），P-O（ニ/ト）］/成ル［O（ガ），P-O（カラ）］/属スル［O（ガ），P-O（ニ）］の下線部のように，かなり雑多である。対象に対する相手を設定するのは，一文一格の原則への配慮からであろう。さらに，変化動詞の始発状態と帰着状態に対しても，たとえば「名前を太郎から一郎に変えた」の場合，格構造は［A，O，$P\text{-}O_1$，$P\text{-}O_2$］として設定されている。「カラ」「ニ」は，［S〈起点〉］や［G〈着点〉］ではなく，［$P\text{-}O_1$〈相手〉］や［$P\text{-}O_2$〈相手〉］である。S〈起点〉やG〈着点〉を移動に限定しようとするのも，一つの立場であるが，これでは，相手の内実が逆に極めて漠としたものになる。いずれにしても，格の定立を確かなあり方で行うことはなかなか難しい。

また，誤植が少し多いことがいささか気になった。186頁の「あつかう」から187頁の「こたえる」までが，187頁から189頁にかけて繰り返し現れる。

石綿は，命題の研究が遅れているという趣旨のことを本書で述べている。これはある点では事実である。しかし，格については，日本においても，60年代の後半から70年代，80年代とかなり研究の蓄積がある。奥田靖雄らの研究，それに石綿自身の一連の研究，そして村木新次郎の研究，さらに自然言語処理の中で提出されてきた研究，また評者仁田にもささやかながら研究がある。

ある段階まで研究を推し進めることは，比較的たやすいことであるが，さらにその上への進展は，ほんの数歩であっても，なかなか困難である。今，深層格（意味格）に対して，従来の研究を統一しうるような決定稿的研究を提出することは，大変難しい。そうであっも，言語が形式と意味との統一である限り，格形式だけではなく，それが担う関係的意味への考察は欠かすことができない。このような時期・状況にあって，我々は意味格の研究に対して何をなしうるのか。あるいは，意味格の研究は何のためにあるのか。もう一度考えてみる必要があろう。石綿の研究は，そのようなことを再考するきっかけを与えてくれるだろう。妄言多謝。

（1999年2月18日発行　ひつじ書房刊　A5判　340ページ　本体価格4600円）

——大阪外国語大学教授——

（2001年4月9日　受理）